ユニットの教育の特徴とその成果

小山真紀　京都大学大学院医学研究科 特定准教授

京都大学大学院 工学研究科・医学研究科「安寧の都市ユニット」は、現代の地域社会が抱える問題に主体的に取り組める人材の育成を目的として2010（平成22）年4月に開設され、同年10月より教育プログラムの提供を開始した。2012年4月には、対話と実践をより重視するカリキュラムになるよう、大幅な改訂を行った（資料1）。おもな科目構成は次のとおりで、いずれも医工両分野のテーマを含む内容となっている。

- 安寧の都市構築にむけた工学、医学の基礎、実践的な研究事例などを扱う科目（都市健康科学基礎論Ⅰ/Ⅱ、安寧の都市政策、健康都市政策論）
- 医工融合的切り口としての都市アメニティ・クライシスマネジメント科目（感性都市空間論、災害健康危機管理論）
- 対話によって相互に学び合う科目（対話・安寧の都市論、対話・安寧の都市デザイン）
- 実践で活躍する外部講師によるセミナー科目（安寧の都市セミナーA/B）
- 受講生がじっさいに対峙している課題に取り組む科目（実践プロジェクト）

プログラムの修了要件は、資料1の科目のうち、共通基礎科目1科目、基礎科目・実習科目2科目以上、セミナー科目2科目、共通発展科目1科目以上、実践プロジェクト型科目1科目を履修し、規定のポイント（大学院生は単位）を取得することである。修了要件を満たした履修生には「安寧の都市クリエーター」の称号が授与される。なお、科目横断的に、前期と後期に1回ずつフィールド学習日を設定しており、教室内だけでなく、じっさいの現場で学ぶ機会を設けている。また、社会人履修生は業務都合のためにやむを得ず出席できないケースも多いため、回数制限つきながら、DVDによる講義の履修を認めている。

資料1 科目標準配当表（2012年4月改訂）

科目名	毎週時数		ポイント(単位)	科目区分					備考
	前期	後期		共通基礎科目	基礎科目・実習科目	セミナー科目	共通発展科目	実践プロジェクト型科目	
対話・安寧の都市論	2		2	○					**必修**
Disaster and Health Risk Management for Liveable City （英語）	2		2		○				いずれか2科目以上
対話・安寧の都市デザイン		2	2		○				
都市健康科学基礎論 I	2		2		○				
都市健康科学基礎論 II		2	2		○				
安寧の都市政策	2		2		○				
健康都市政策論		2	2		○				
安寧の都市セミナー A	1		1			○			**必修**
安寧の都市セミナー B		1	1			○			**必修**
災害健康危機管理論	2		2				○		いずれか1科目以上
感性都市空間論		2	2				○		
実践プロジェクト	(5)	(5)	5					○	**必修**

本稿では、ユニットの教育の概要と、毎年次ごとに実施した履修生アンケートの結果について紹介する。ただし、本稿作成時点が最終年度の2014年度であるため、第五期生の記録は含まれていないことをお詫び申しあげる。

履修状況

本ユニットでは、2010年の開講以来、毎年、正規履修生として社会人20名、大学院生20名を定員として受け入れている。また、大学院生を対象として、正規履修生とは別に一部の科目の履修のみを行う科目履修生も受け入れている。社会人と大学院生が一緒に講義を受講するのも、本ユニット科目の特徴となっている。開設年度からこれまでの科目履修生、正規履修生および正規履修修了者の数を資料2に示す。

大学院生については、各研究科のカリキュラム上、ほかにもさまざまなコースが開設されていることや、大学院修了のための必修科目の履修などの事情によって、ユニット修了の要件を満たすことが難しいという事情があったため、正規履修者数は少なくなっている。その反面、科目履修者数は年々増加するという傾向にあった。第二期生の社会人入学者数が少ないのは、第一期生は2010年10月開講であったのに対して第二期生は2011年4月開講で、履修期間が半年間重複していたことにより、同一派遣元からの参加が難しかったという事情による。

ユニット提供科目のなかで特徴的なものは、対話型の科目、実践プロジェ

資料2 履修状況

			2010年度 第1期生			2011年度 第2期生			2012年度 第3期生			2013年度 第4期生			2014年度 第5期生			合計		
			男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
入学者数	正規学生	工学研究科	5	0	5	11	1	12	4	1	5	10	2	12	6	0	6	36	4	40
		医学研究科	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2	2
	社会人		13	4	17	11	0	11	22	3	25	13	6	19	13	3	16	72	16	88
	計		18	4	22	22	2	24	26	4	30	23	9	32	19	3	22	108	22	130
修了者数	正規学生	工学研究科	1	0	1	3	1	4	4	0	4	9	1	10	※2014年度12月に作成のため、該当データなし			17	2	19
		医学研究科	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1				0	2	2
	社会人		11	3	14	10	0	10	19	2	21	13	5	18				53	10	63
	計		12	3	15	13	2	15	23	2	25	22	7	29				70	14	84

クト型科目および科目横断型フィールド学習である。対話型科目は、専門分野の異なる講師2名が一つのテーマについて、独自の切り口で話題提供を行い、履修生を交えた対話を行う（資料3上）。ここでは教員との対話だけでなく、視点の違う社会人履修生と大学院生（科目履修生を含む）が相互の視点に学ぶ機会にもなっている。

実践プロジェクト科目では、履修生がそれぞれに対象とするフィールドとテーマの設定を行い、主体的に調査研究あるいは活動のプロジェクトを企画・遂行し、最終成果を論文形式にまとめて発表を行うものである。

横断型フィールド学習では、次のようなテーマに取り組んだ（資料3下）[*1]。

●神戸市松本地区における復興まちづくりの現場（2011〜2014年）
●大阪市からほり地区、北浜テラスに学ぶまちづくり（2011）
●大阪市西成区における生活困窮者の支援活動を学ぶ（2012）
●奈良山辺の道における市民参加型観光まちづくりの現場（2013、2014）
●グランフロント大阪における新しい中心市街地のまちづくりの現場（2013）
●介護福祉施設および在宅介護現場の体験を通じて実践的な取り組みを学ぶ（2013、2014）

社会人履修生と大学院生とでは、講義への参加状況に多少のちがいがみられた。じっさいの業務や活動を通じて問題意識を明確にもっている社会人履修生は、講義中に積極的に質問を行い、対話講義においても自らの業務内容や経験を踏まえた議論を積極的に行う傾向がある。いっぽう大学院生は、社会人と比較するとそういった経験が少ないこともあり、意見表出の割合は全体的に少ない傾向にある。しかし、医学系の専攻の学生は医学

*1 フィールド学習は2011年度から試行され、2012年度のカリキュラム改訂によって正式に位置づけられた。

系の視点から、工学系の専攻の学生は工学系の視点から、それぞれに質問や問題提起がなされたり、社会経験が少ないからこその本質的な質問や意見などがなされた。これにより社会人履修生と大学院生とが相互に刺激を受け合うような対話がなされており、大学院生だけの講義、社会人だけの講義にはない魅力となっている。

履修生アンケート

毎年次終了時に履修生アンケートを実施している。最終年度である2014年度は、まだ年度の途中であるためデータがないが、これまでの全4期分のアンケート結果から、ユニットにおける教育プログラムがどのように評価されたか、その経緯等について説明する。ページ数の制約から詳細の説明は割愛するが、以下の考察部分は、アンケートの自由回答の内容に根拠をおいている。

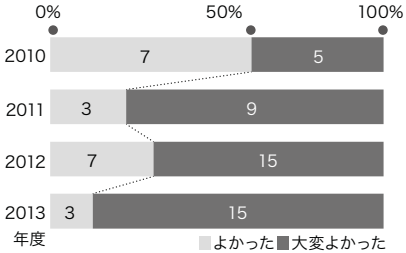
ユニットの履修の満足度については4期とも、「よかった」と「大変よかった」で100%を占めた。2010年度は「大変よかった」の割合は40%強であったが、2011年度からはおおむね70%を超えている（資料4）。

この背景には次のような要因があると考察できる。まずひとつには、2010年度は発足年度であり、安寧の都市のビジョンがまだ明確ではなかった。そのために、講義の全体の枠組みが不明瞭で、各コマの講義が安寧の都市論の構築にどうつながるのかがわかりにくい構成だったが、第一期生修了後の2011年度後期からは、各講義において「安寧の都市」のキーワードを使っていただくようにしたことで、ビジョンが明確になった。

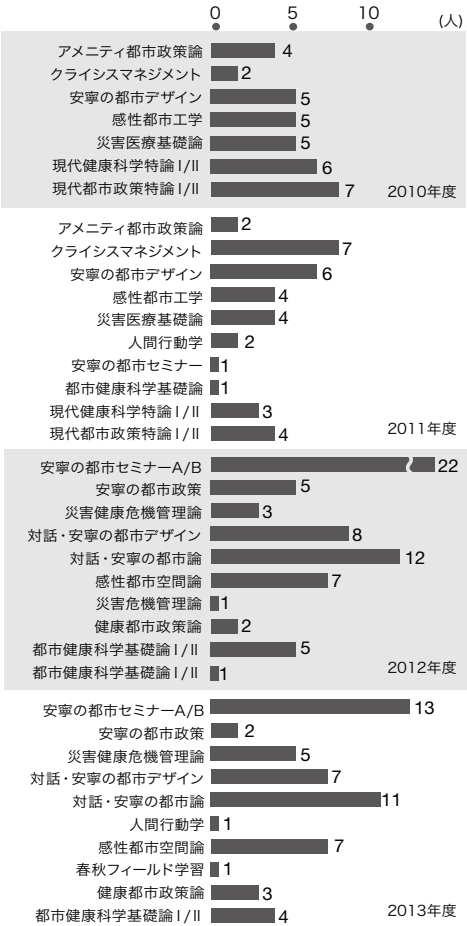
また、2012年度のカリキュラム改訂後は、オリエンテーションのさいにユニットのねらいと安寧の都市クリエーターの位置づけ、カリキュラムにおける各科目の位置づけなどについて解説し、各科目の最初の講義には、その科目の位置づけとねらいについて説明するようにするなどの改善を行ったため、2011年度からの満足度が大きく上昇する結果になっていると思われる。

ユニット科目のなかでおもしろかったと感じた科目を3つ挙げていただいた。その結果、安寧の都市セミナーA/Bが特におもしろいと受け止めら

資料4 履修満足度



資料5 おもしろかった講義



れており[*2]、次に対話型の講義の回答数が高くなっている(資料5)。自由回答においても、多様な分野で課題として取り上げられている事項(まちづくり、災害、iPS、宗教、哲学など)について、研究者や実践者の立場で取り組んでいる講師たちの生の声を聞けることに対する満足度が高い。

実践プロジェクトの満足度では、2010年度と2011年度では約70%の満足度であったが、2012年度のカリキュラム改訂前は、実践プロジェクトは水曜日の講義時間内に位置づけられておらず、ランチミーティングや土曜日に実施するなどしていた。改訂後にはこれを水曜日の5時限目に設定し、基本的にはその時間内でディスカッションを行うように変更し、アンケートのフィードバックを行うことにより、満足度が上昇したと考えられる。(資料6)。

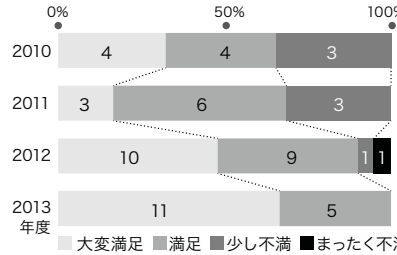
DVD視聴については、2011年度をのぞいてはまったく使わない人が40〜60%程度であり、20%弱の人が大変よく利用している。自由回答でもDVD履修制度の必要性が述べられている。社会人を対象とする教育プログ

＊2 2010年と2011年度のアンケートでは、「安寧の都市セミナー」について聞いていないため、ここには含まれてない。

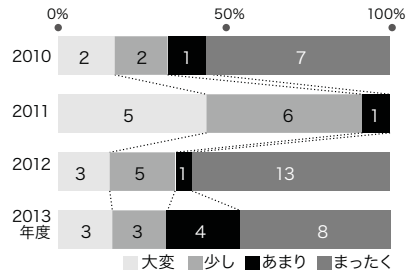
ラムにおいては、業務都合で決まった日時に通学することが困難である人たちに対しての配慮が必要であることを示している(資料7)。

ユニットのカリキュラムでは、実践プロジェクトで論文をまとめる必要があるため、これが社会人履修生にとっては大きな負担となっていた。一方で、自由記述による回答からは、問題解決能力や学問の楽しみ、仲間や教員との協力など、得るものも大きかったようすが読み取れた。しかし、「修了するために必要なこと」については、半数以上の社会人履修生が「職場の理解」をあげており、職場の理解なしに大学で学ぶことは困難であることが示されていた。

資料6 実践プロジェクト満足度



資料7 DVD履修の利用状況



ユニットで得られたこととしては、「専門知識」だけでなく「人脈」と回答した履修生が多い。これを裏付けるように、第一期生が中心となり「安寧会」という同窓会を結成し、セミナー後に講演者や教員を交えて懇親会を行うなどの活動も継続している。

まとめ

本稿では当ユニットのカリキュラムの概要、履修状況について解説した。さらに、履修生アンケートの結果から、ユニットの教育プログラムに対する評価とここで得られたこと、評価の高い科目の状況、実践プロジェクトの評価と、社会人が大学において履修を続けるために必要なツールと環境について述べた。

ユニットは2014年度で終了するが、安寧会の活動は継続して行う計画があるとのことである。ユニットとしては、①教育プログラムそのもの、②大学における社会人履修生と大学院生混合の実践的な科目設定、③ユニット履修生を中心としたネットワークという大きな3つの成果を得た。ユニット終了後も、これらの成果をそれぞれが活用し、さらなる発展を期待したい。